オオイタデジタルブック OITA DIGITAL BOOK

大分合同新聞社

大分合同新聞

渡辺克己著

第二十九章●桃園かいわい

初版：2008 年 2 月 29 日発行

Next

第二十九章●桃園かいわい

【写真】高城観音の参道

・大文字川の洪水
・掛け小屋の芝居
・サンチン飯
・碩田と惟精
・農園の外人さん
・高城観音
・大友家臣の遙拝所
・経塚・カワラケ破り

奥付け／デジタルブックについて

発刊に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37（1962）年 11 月から翌 38（1963）年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58（1983）年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8（1962 ～ 63）年当時のことです。

▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58（1983）年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。

高城観音の参道

大文字川の洪水

桃園地区は、延岡藩が豊後に食いこんでいた飛び地の一つであった。

延岡藩はこのほか判田、東稙田、稙田と滝尾の一部にまたがる一帯、東庄内の一部、湯平と由布院の一部、西国東郡の現在の真玉、香々地町一帯というふうに飛び飛びに領地を持っていた。その総石高は二万六千百七十石。府内藩が二万一千二百石だから、これより多い領地を豊後に持っていたのである。

ついでに、藩政時代の大分県内が各藩に分割されていた状態を調べてみたが、大分県は小藩分立どころのさわざではない、ずいぶんひどい分割をされている。

独立藩は、石高の多い順に並べると、中津藩（奥平）岡藩（中川）臼杵藩（稲葉）杵築藩（松平）日出藩（木下）府内藩（大給）佐伯藩（毛利）森藩（久留島）の八藩、それに宇佐神宮領が加わる。他藩の飛び地が延岡領を筆頭に、肥後領、島原領、立石領、時枝領、これに幕府直轄の天領。これらが小刻みに各藩内の要所を押え、あるいは各藩境の要地を占め、まさに大分県内はバラバラに切り刻まれているのである。領内がどうやら満足にあるのは、岡藩と佐伯藩、森藩ぐらいのもの。これとて天領がシミのようにくっついており、森藩などは天領にほとんど周辺をとりまかれている。

これでは、おおらかな人間が育つはずがない。

桃園の延岡藩代官所は豊後の領地の総元締めとして千歳のいま大分無線電報局のある丘上、天満社の南方にあった。ここを

いまも「お役所」と呼んでいる。ここから牧、滝尾を通って奥地に通じる道路によって各飛び地との連絡をとったり、海路延岡と往復をしていたわけだ。その港がどこだったかはっきりしないが、乙津川に臨んだ三川か原川に面した新貝に船だまりを持っていたものと想像される。

桃園の道路は、滝尾あたりでいう肥後道につながっており、あるいは鶴崎にある各藩の飛び地にとっても自藩に通じる主要な連絡路であったから、人の往来はさかんであった。

千歳に丘上から流れている大文字川という小川があるが、この川のほとりには、かつて数軒の茶屋があって、往来の旅人のいこいの場となっていたと伝えられている。この茶屋の中には旅人にこびを売る女を置いていた店もあったとみえ、「大文字川の洪水」という笑い話が伝わっている。

各藩の使者が、この茶屋の女の色香におぼれて、ついうっかり居続けをし、ために大事な使者の役目が遅れる始末となる。はてどうしたものかと頭をかかえる使者殿に、女がこう耳打ちをする。「大文字川の洪水で足止めをうけたといわんせ」

使者殿は、この入れ知恵で、遅参のせめをまぬかれた。各藩の重役は「豊後の大文字川は、たびたびの出水で使者の足を奪うところをみると、よほどたちの悪い大川じゃな」と、こぼしていたにちがいない。

掛け小屋の芝居

いまはよほどへき遠の地に行かなければ見ることができない

が、明治から大正期ごろまでは大分周辺の農村にも、あき地に掛け小屋をたてて芝居が興行された。

これらの芝居一座は県外からやってくるものもあったが、杵築の「新富座」は季節ごとに決まってやってくるなじみ深いもので、役者たちの演技の評判もよかった。杵築の芝居は、中津の芝居とともに歴史の古いものだ。

昔、浜の市の期間中、有力な芝居が興行を競ったもので、藩政時代にはたいてい三つぐらいの芝居小屋が立った。ここで看板をあげれば、地方巡業の芝居ではまず一流とされ、その後の評判にも響いた。杵築と中津の芝居一座は、代々ここの小屋で興行した記録をとどめているのである。

記録を拾ってみると、寛政十年には阿波のあやつり（人形芝居）一座三十五人、杵築の市岡嘉吉一座四十人、同じく杵築の児島仙吉一座二十二人。文化三年には阿波のあやつり一座四十人、中津の松屋駒吉一座四十七人、大阪の軽業一座二十八人。文政十一年には阿波のあやつりと江戸の軽業、杵築の岡島品吉一座といったあんばい。杵築か中津のどちらかの芝居がきっとかかっている。

このように伝統をもった芝居が農閑期をねらって村から村を巡業していたのだが、交通の発達や新しい娯楽の浸透などで、いまはすっかり小屋掛けの芝居というものの影が薄くなってしまった。

桃園や日岡付近の芝居小屋は、鷹松神社の東側広場や、いまの渡線橋の北側あたりの、草っ原に立った。季節はたいてい稲刈りが終わって、ほっと一息ついたころだった。むしろ囲いの

小屋に役者の名を書いたのぼりがはためき、絵看板もかかげられると、村では役者の評判などもささやかれた。

芝居は、村内の有志が請け元になって興行させるわけで、この請け元から村の地主などの有力者階級に招待状が配られる。それにはちゃんとさじき券が添えられている。招待状をもらえばタダで見るというわけにいかないのが常識だ。それぞれ応分のハナを包まねばならなかった。一般の入場料は五銭ぐらいだが、ハナは一円を下らない。ハナが請け元に届けられると「だれだれさんよりハナいくらいくら頂き…」といちいち披露されるから、包みが少なければ有力者のこけんにかかわる。小屋芝居はこのハナで採算がとれた。

芝居見物には、どこの家庭も一家をあげて出かけるのだから、中で食べる弁当ごしらえもたいへんだ。カマボコやチクワ、里芋、コンニャクなどの煮しめを重箱に詰め、黒ゴマなどをまぶした握り飯もふんだんに用意して出かけたものだ。芝居も前段が終わって、拍子木とともに「これより中入れ…」の声がかかると、それぞれ弁当を開き、酒とっくりを傾けるのである。

芝居の幕間には中売りもサジキを縫って歩いた。

「ええ、キンボーにイチリダマ、ミカンにカキ…」

キンボーはオコシにアメをつけた菓子、イチリダマはアメ玉のことだ。そんなダ菓子が売り子のかかえた箱の中に並んでいた。

新富座のようなカブキ芝居のほか、「軍談芝居」というのもきた。これはチョンガレ芝居、ウカレブシ芝居などともいわれた浪曲芝居である。また大正から昭和の初めごろにかけて活動写真も小屋掛けで興行されたこともある。

サンチン飯

桃園は、明治二十二年に三川、千歳、山津、乙津の四村が合併して一村となったのだが、このとき村名をどうするかでもめ、結局けんかなしの全然新しい名をつけようということになり、桃園村となったのである。この名付け親は千歳の清水弥七さん（村の長老で明治水路建設に名をとどめている功労者の一人）だった。俗世間を離れ、豊かな実りと平和な生活を夢みた陶渕明の仮空の仙境「桃源」の故事にならって、この村が豊かな別天地をおう（謳）歌するようにと「桃園」の名を選んだのだという。

「桃源」へのせつない夢を追う農民の願望。それはこの地に限らず、すべての農民が幾百年いだき続けてきたことか。そして幾百年後までも果てなく追い続ける悲願でもある。

もっとも現代は、米の飯を食い、動力化した農耕機が動き、テレビや電気冷蔵庫を備え、収穫は明治大正期に比べると飛躍的に上昇している。史上空前の豊作といったことばがあらわれるようになった当節だ。かつての農民が夢みた「桃源」は、あるいは形の上では実現しているのかもしれない。しかし、そうなればなったで、現代的な新たな苦悩や不安が農民生活を追いたてている。真の桃源郷はやはり永遠の夢でしかないのだ。

前に「津留のカラスがスアワ、スアワと鳴く」と書いたが、食生活の貧しさは津留に限ったことではなかった。

桃園かいわいではサンチンということばがあった。麦とアワとキビを入れた飯のことだ。これが一般の農民の主食だった。

さらに貧農になるとキビのかわりにサツマイモがふんだんにはいっていた。イモ入りのサンチンだ。中流程度の農家では「コザネ飯」を食っていた。コザネというのはウスでひき割った麦のこと。コザネ一升に米二合も混ぜればいい方だった。だから米のことをツナギと呼んだ。米は麦のつなぎでしかなかったのだ。

戦後米飯のことを銀飯と呼んだことがあるが、滝尾の曲で聞いた思い出話に、麦飯を銀飯、アワ飯を金飯といったということだ、正月のさんかにち、これをたいて食べるならわしがあったという。正月に米を食べないで金飯銀飯を食べる、ひとつの儀式めいたならわしがあったのは、やはり主食である麦やアワに感謝の心をあらわすものだったのだ。

いまでも年寄りは生魚のことを「ブエン」と呼ぶ。ブエンは無塩のこと。かつては塩サバ、塩サケ、塩イワシなどの塩物か、干物が普通だったから、生魚はとくにブエンと呼んで珍重したのだ。ブエンを食べることなど、それこそお祭りか正月ぐらいのものだ。

お祭りにハマチをふんぱつすると、台所の人目につきそうなところにぶらさげておいた。これを食べたこどもが、友だちの鼻先に「ハーッ」と生臭い息を吐きかけ「ええにおいじゃろうが」と自慢の鼻を動かしたものだ。

塩魚でもめったに食べることはなかった。塩サケとか塩サバなどを焼いたときは、サラについた油が洗ってもとれないので、カキの葉の上に乗せて食べたと桃園の老人が話していた。洗剤の発達した当節から考えるとウソのような話である。

碩田と惟精

桃園小学校の校長室に、ちょんまげ姿にカミシモを着て端座している人物の彩色画がかかげてある。学者で尊皇家の後藤今四郎碩田の肖像画である。「鶴崎市史人物編」（久多羅木儀一郎著）によると後藤家は乙津の富豪で、代々紀州藩、岡藩、臼杵藩、肥後藩、島原藩、延岡藩など、大名の用達をしている。つまり日岡の米幸と同じように大名の金策に応じていたのである。また米幸もそうだが、このような富豪になると、慈善事業に熱心で代々、村内が凶荒にあうごとに金穀を配って農民救済につとめたといわれている。

碩田の父弥四郎は尊皇家で、寛政年間に高山彦九郎が豊後を訪れたさいには弥四郎をたずねて、この家に長期間滞在している。弥四郎は彦九郎に深く共鳴して、その尊皇の志を嗣子碩田に伝えたという。だから碩田には父をなかだちにして熱血の人彦九郎の思想がそっくり注ぎこまれたのであった。

碩田は初め帆足万里の門に入って漢学を修め、ついで田能村竹田に師事して詩画を学び、渡辺重名に皇学を教えられ、さらに射法、砲術、禅、茶香、生け花に

桃園小学校付近（挿絵：田中 昇）

至るまできわめるという多能の人で、とくに竹田には傾倒してその影響を受けている。竹田は京阪に旅行する途中必ず乙津に立ち寄り、碩田の家に泊まった。

また碩田は毛利空桑とも交友が深く、尊皇攘夷（じょうい）の志を通じあっていた。高杉晋作なども碩田を訪れて意見を交換し、しばしば文通もしている。

碩田は空桑と親交がありながら、その性格が非常に対照的なのもおもしろい。碩田が田能村竹田に師事して詩画をものし、茶、生け花の風流にも通じているのにたいし空桑は豪放で、詩酒風流を目のかたきにしていた。だから空桑は山陽、竹田は大きらい、彼らが死んだときは快哉を叫んだということだ。それなのに碩田とは親しくしていたということは、碩田が風流の半面にきびしい気骨を蔵し、空桑と一脈通じるものがあったのだろう。

碩田は明治十五年に乙津で没しその墓は千歳の丘の下にある。

後藤家は碩田を最後に没落してしまったとされていたが、最近ひょっこり桃園小学校に碩田の曾孫という人からたよりがあり「碩田の肖像画が学校にあると聞いたので」と一万円の寄付金を同封してあった。その人は現在大阪市民病院の副院長をしている後藤進さん。

後藤家が没落後、碩田の孫の亦四郎さんが志を立てて乙津を出、大阪で医師となった。そして亦四郎さんの子の進さんもまた医学を修めて大阪に永住しているというのである。

桃園にはもう一人傑出した人物がいる。島惟精だ。この人は

延岡藩の代官所につとめていた阿南家の出だ。阿南家はいまの桃園小学校の位置にあった。惟精は秀才のほまれが高く、府内藩医安東陶窓の養子にもらわれ、安東家の本姓島を名乗った。

惟精は日岡の菊池清彦らと気脈を通じて討幕に奔走、府内藩の藩論を勤皇に統一して藩主近説の危機を救ったりしている。明治維新後は政府の役人となり岩手、茨城の県知事、内務省土木局長などを歴任後明治十七年には参事院議官に進んだ。明治水路着工には、この人が陰の力となったことは前に書いた。同十九年五十三歳で東京で病没。死の床に元老院議官の位を贈られている。

桃源を夢みた桃園のおだやかな田園は、このような人物をもはぐくんでいるのである。

農園の外人さん

同地区から台地に上がった一帯（東原）をドイツ人の園芸家が開墾して果樹園を作っていたことがある。あれは第一次大戦後数年間のことだった。もっともドイツ人が経営していたといっても地主は別にいた。

大正の初めごろ大阪の土建屋で橋本料左衛門という人が、この東原一帯二十数町歩を買った。どういういきさつで、そんな広大な土地を大阪の人が買ったのか、そこのところはもうだれも知っている人はいないが土地の人は橋本農園と呼んでいた。のちに伊予の岩井岩吉という人がこの農園を譲り受け、この人がドイツ人の園芸家に経営を委託したのだと、故清水政七さん

が生前語っていた。農園に住みついたドイツ人は、大きな男で、皮膚の色の違う外人さんを、物珍しげに見上げるこどもたちにも、柔和な微笑を投げかける人なつっこいところがあった。

付近の日本人とはほとんどつきあっていなかったが、たった一人、岡地区の清水政七さんとは親しんでいた。ちょいちょい台地からおりてきて、政七さんの家に寄り、雑談をして帰っていった。この人の名はアレキサンデル・スパン。九州大学の講師をしていて、ときどき福岡に出かけるふうだった。

「日本人は農園がりっぱにできあがってもなかなか道を作らない。まず道ができ、それから農園を始めるべきです。あべこべですね」「個人の農園経営に二十町歩以上も持つことは広すぎます。大きければ、それだけ収穫も大きいと考えるのは間違いですね」

スパンさんは雑談のうちに、こんな話を政七さんにしたそうで「外人の考え方は違う」と政七さんはすっかり感服し、あとまでもそのことをよく若い人に語っていた。

このスパンさんにウドンを食べさせたことがある。いまでもやっている家庭があるかもしれないが、昔は大分地方のウドンの食べ方は、他地方とは異なっていた。大きなドンブリに湯を入れて、それにウドンを浮かして供するのである。したじは別の器に入れてあって、これにつけて食べるわけだ。知らない人は、ウドンの浮いた大ドンブリに、したじを流しこんで食べようとし、四苦八苦する。政七さんの家で、このウドンをスパンさんに出したのだ。どうするか見ていたら、ハシをつける前に「食べ方を教えてください」と、くわしい説明を求めた。味は

どうかと尋ねたら「ふつうのウドンの味は私にもわかるが、この味はわからない」

自分の意思をはっきり表現するこの態度が政七さんの印象に強く残ったそうだ。当節の若い人は、こんなていどの意思表示はあたりまえだが、昔の日本人は食べ方を教えてくれだの、味がわからないなどはっきりいえないようなしつけを受けていた。まずくても、おいしいとおせじをいうのが普通だ。

スパンさんの農園はうまくいかず四、五年で福岡に去った。のち福岡で日本人女性と不倫な問題を起こし、国外退去の処分を受けたそうである。

高城観音

高城駅の名は、高城観音からとったものであることは前に書いたが、この高城観音は一般に「高城さん」と呼ばれ、安産の霊験あらたかとの評判は県外まできこえていた。

いまは、お参りの足がとだえがちだが、それでも安産を祈る参拝者が日に幾人かあるそうである。

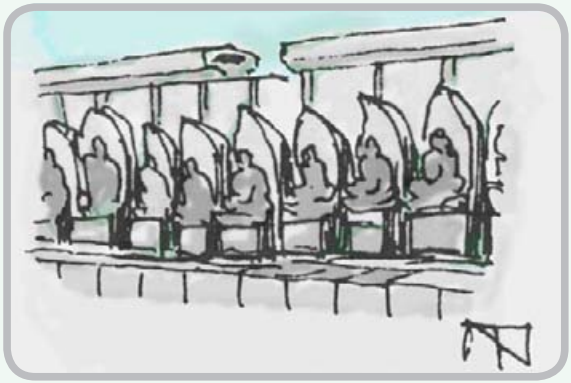
縁起によると、昔この台地に城をかまえていた豪族阿曾小連の妻が難産で苦しんださい、日ごろ信仰している如意輪観世音菩薩に安産を祈ったところ、たちまち感応があって安らかに出産した。そこでお堂を建てて観世音をまつった。これが高城山子安観音の起こりであるという。

ところが、この観音さまは、キリシタンの礼拝した聖母マリアの像ではないかと、史家の興味をそそったことがある。

高城観音の東方の台上に昔、城があったと伝えられる場所があり、そこを城山と土地の人は呼んでいる。豪族が館を築いてこのあたりを支配していたのかもしれない。萩原の古老が話していたが、むかしこの城に「天王四郎」と呼ぶ豪勇が住んでいた。それで、男まさりのおてんば娘を「お蘭さまのごたる」というのにたいして、あばれん坊で負けずざらいの男の子を「天王四郎のごたる」と、明治ごろまでいっていたというのである。

この天王四郎は、キリシタンの敬慕する天草四郎の勇猛さが伝説化して伝えられたと考えられないこともない。そして天草四郎の伝説を伝えるほどこのあたりにキリシタンが多かったのではないかという推測が生まれる。それに寺では子安観音のお姿として、赤ん坊を抱いた彩色の掛け軸を参拝者に分与している。ご本尊がこの絵のようだとすれば、子を抱いた観音像は珍しい。といったようなことから大友時代のキリシタン全盛期に持ち込まれたマリア像を豪族が持仏堂に安置して崇拝していたか、あるいは「かくれキリシタン」たちが、ひそかに礼拝したマリア観音かと、学者の興味をそそったわけである。

大正年代に、中央から学者がやってきて、本尊をしさいに調べたことがあった。その結果、本尊はマリアではないというこ



高城観音参道

とになったらしい。なにしろ、年ふりた木彫の本尊は、もうお顔だちもさだかでないほど朽ちているということだ。それに掛け軸の絵のように、赤ん坊は抱いていない、とお寺で話していた。

とにかく、マリア像であろうとなかろうと、またどのようにご本尊は朽ちようとも、幾万人もの産婦を力づけ、産褥（じょく）に安らぎを与えた、数百年の星霜は尊い。たとえ触れればぽろぽろとくずれ落ちる、現身の滅びの「時」がきても、その内にこもった信仰の念力は滅びないだろう。マリアであろうと、観音であろうと、そんなことはいまのご本尊にかかわりのないことなのだ。

もともと高城観音は「高城山生慶寺」と称する寺院だったが、天正の兵乱で薩摩軍に焼かれて滅亡したと伝えられている。のち千歳樋奈尻の安倍道裕という人が池中から本尊を拾いあげて再建したという。いらい吉祥院、観音院の二院が観音堂を守り続けてきた。いまもこの二院の両阿部家が協力している。

大友家臣の遙拝所

千歳の山の中に大友関係の遺跡がある、と郷土史家の立川輝信さんが話していたのでたずねてみた。

千歳の台地の東端が、乙津川畔の田園を指さしているように細く伸びている小丘を、経塚と土地の人は呼んでいる。ここに昔、大友宗麟の塔があったともいわれている。地区の共有林だそうで、いまは雑木と草ヤブにおおわれて頂上に登る小道さえない。木の根につかまり、雑草を踏みわけて登ると、丘上の東

の端に、ヤブに半ば埋もれて、りっぱな塔が建っていた。周囲は玉がきをめぐらせた跡があり、前方にはこわれた灯ろうが二基。そして一段高い塔の位置に上る石段の跡もある。またあたりには句碑か記念碑にでもしたらよさそうな庭石が配置されているが、すべて深い雑草の中にこけむしている。

塔は明治十年の建立で、前面には大友の紋所を大きく刻んで、その下に「遙拝所」とほりこんであった。後方には大友能直が鎮西奉行として豊州を治めてから二十二世義統で終わるまでの盛んな治世に浴さなかった家臣の子孫が、祖先を崇拝するために、ここに碑を建立し、毎年四月に祭りを行なうことを絶やさないことを誓う、という意味のことが刻みこまれてある。

文章と筆は毛利空桑。そして建碑の中心になったのは「大友氏旧士臣苗裔」吉岡為儀、一万田統正とある。

吉岡も一万田も大友時代の歴史に現われる家柄だ。とくに吉岡氏は薩摩軍が来攻したさい、鶴崎で薩摩軍をせん滅した女傑吉岡妙林尼の名が輝いている。

妙林尼は吉岡鑑興の妻で、夫なきあと、遺領の鶴崎高田地方を支配していた。薩摩軍が来攻したさい、にわかに鶴崎に一城をかまえて防備を固め自ら陣頭に立ってさまざまの奇策をもって敵をなやました。さらに敵方の誘いに応じて一応和を結び敵の将兵を酒色でとろかしておいて一挙にせん滅してしまった。まさに史上に名をうたわれている巴御前や板額をしのぐ知勇にたけた女傑であった。

この戦いのさい、急ごしらえの城となったのは、高田の妙林尼居館だったとされているが、あるいはこの千歳の丘上東端の地で

あったかもしれない。吉岡氏は千歳にとりでを築いていたといわれており、経塚とは小さな谷をへだてている北側の台上を「土井の内」といまも呼んでいる。そして、土井の内の三方に堀の跡がある。いまは一部がため池となり、また道路や耕地にされているが、あきらかにとりでを守る堀（あるいはカラ堀）の跡だ。

「殊に大将尼なりければ、何程の事あらんと思ひ侮り、ただ一揉みに攻亡さんと、勢ひに乗って駆けたりければ、件のしつらひ置たる処忽然として大山の崩るゝ如くどさどさと落入りたりける程に、人馬上が上に重なり伏し、坑にぬかりて失せにける。残る軍兵胆を冷やしあはつる処を、鉄砲二百八十挺雨の如く打ちかくれば、討たるる者数を知らず」

「豊薩軍記」の中の妙林尼奮戦の一節である。この勇ましい戦いの場を、土井の内付近にあてはめてながめると、強敵を悩ますには絶好の地の利のように思われる。

妙林尼の子孫たちが、この台上を大友の遙拝所に選んだのも、何かそのようないわれがあるからではないだろうか。

経塚・カワラケ破り

経塚の大友遙拝所は、いつごろまで、大友家臣の子孫によって祭りを取り行なっていたのか、だれも知る人がいない。ただ経塚はこの付近の農家の人々の遊楽地として、明治時代から大正にかけて親しまれていたという。そのころは、経塚台上には、数本の形のいい老松がそびえ、庭石が配置されているちょっとした公園地で、台上からは鶴崎一円がくまなく見渡せるすばら

しい展望であった。

神武天皇祭の四月三日は「山のぼり」といって、大分近郊ではおとなもこどもも最大級のごちそうを折り詰めにして、それぞれ仲間を誘いあわせて付近の山にピクニックに出かけたものだった。経塚はその日の、おとなたちのピクニック会場になるのがならわしだった。

千歳、乙津、山津、三川あたりからも経塚に集まってきて、それぞれ円陣をつくって酒をくらい、歌い、踊り、大いに歓を尽くした。中にはシャミ太鼓でどんちゃん騒ぎを競う連中も幾組かあった。

ここを経塚と呼ぶのは、次のようないい伝えがある。

キリシタンの栄えた大友宗麟の時代に、寺院を弾圧して盛んに焼き打ちをした。そのときこの地にあった善福寺も災にあい焼滅した。現在の善福寺地区がその寺院跡である。善福寺では被災のさい経文や仏具を持ち出し、石ビツに納めて裏山に埋没した。その山を経塚と呼んだ。

大友時代に一部寺院が焼かれたことは事実らしいが、善福寺の場合あるいは薩摩軍の来攻のさい兵火にかかったのかもしれない。それがキリシタンの寺院弾圧に混同されたとも考えられる。また経塚の石ビツというのは、古墳ではなかっただろうか。いまも古墳の右槨（せきかく）を思わせる巨石が台上に散乱している。地形からいっても古墳のありそうな土地だ。（明治の初めごろ千歳の清水弥七さんらが古墳を発掘して、刀剣やハニワを発見したことがあると、あとでわかった。）

いま千歳地区の上り口にある生目神社というほこらは、明治

年代までは、この経塚台上にまつってあったものだ。延岡領時代に、日向の生目神社を勧請したのだという。この生目神社は眼病に霊験のある神さまといわれる。それで、社前に備えた鉄鉢に常時水をたたえてあって、目の悪い人は、このお水をもらって目につけていたということだ。大正ごろまでは盛んにお参りがあったそうだが、いまどきそんな不潔な迷信は通用しない。

延岡藩の代官は、本国の神社まで勧請して領地統治をやっていたわけだが、古老が、こどものころ土地の年寄りから聞いた話に、代官所の役人の指揮で「カワラケ破り」という行事が経塚台上あたりで行なわれていたという。はち巻きをしめ、額にカワラケをはさんだ農家の若者たちが、紅白に分かれて木剣でそのカワラケを割り合うのである。これは代官の支配下に農兵組織をもっていて、ときどき召集して戦闘訓練をやっていたのだ。

府内藩でも、幕末の騒然たる政局の非常に備えて、元治元年に農兵志願者を募っている。南大分の畑中をはじめ、羽屋、古国府、豊饒などの農民がおもに志願したようだが、萩原などでは、農兵反対の言動をなす者があって庄屋以下きびしいおとがめを受けている。農兵組織は、武士だけではたよりにならなくなった幕末の世相を反映したものだ。

千歳代官所の武士たちは、明治の版籍奉還で、ほとんど郷里延岡に引き揚げたが、そのまま千歳に居ついて帰農した人もある。いま大分駅前で旅館をやっている佐藤幸雄さんも、その居残り組の子孫だ。幸雄さんは、祖先が書き残した記録をたよりに延岡領だった土地の庄屋などの家をたずね、豊後延岡領の記録をまとめる仕事を、ひとりこつこつやっている。

オオイタデジタルブック

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！！

大分合同新聞社　NAN-NAN　別府大学

著者略歴◇渡辺 克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十三年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。

郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。

デジタルブック版「大分今昔」　第二十九章 ●桃園かいわい

2008 年 2 月 29 日初版発行

筆者　渡辺 克己

挿絵　田中 昇　（着色：佐藤 克治）

編集　大分合同新聞社

制作　川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行　NAN-NAN 事務局

〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社